宝慶寺参禅

２００９年5月2日～5日
西　原　京　子

５月３日（日）

連休初日で混みあう東京駅を後にする。向かうは北陸の秘境、宝慶寺である。米原から北陸本線に乗り継ぎ福井へ。さらに福井駅から越前大野までバスに揺られる事１時間。バスの窓から田植えの始まった田んぼと農家の瓦屋根が見える。日本の風景そして日本人の原点がここにはある。

東京から５時間。やっと越前大野に到着する。小さい瓦屋根の駅は人もまばらでコンビニが一軒もない。あっぱれ！空は青く空気が美味しい。バンザイして叫びたい気分！

越前大野から宝慶寺までは交通手段がないため、前もって寺に到着時間を知らせておく。迎えに来てくれたお寺の車でさらに３０分。どんどん人家がなくなっていく。この世の果てに行くような不安感を覚えた頃、忽然と宝慶寺の山門が姿を現した。

宝慶寺は福井県大野市から１２キロ、清流川上流、標高５００メートルの谷、ちょうど銀杏峰の懐に抱かれるようにひっそりと佇む禅寺である。７００年前、道元に伴って日本にやって来た中国僧寂円により開かれた大本山第二専門道場である。

私は建築物のあまりの古さに圧倒されながら、山門をくぐり、恐る恐る本堂のきしむ扉を開ける。突然、「あんたはどなたですか？」と太陽のように暖かく出迎えてくれたのは参禅係の寂光さんだった。「西原です。」というと「ああ、あんたが西原さんね。」と長年の知り合いのように手招きをして中へ入るように合図している。「それじゃ、まず部屋に案内しますのでついて来て下さい。」私は寂光さんの後について隙間だらけの廊下を進み、禅堂の裏、参禅者用の部屋へと案内してもらう。

寂光さんは学校の校長先生だったそうである。それが定年退職後、思い立って仏道に入った。それ以上は聞かない。物腰の柔らかさ如才なさが苦難を超えてきた寂光さんの人生を物語っている。聞く必要はない。畳の上では３匹のカメムシがゆっくりと行進している。寺はお世辞にもきれいとは言えない。掃除が行き届いていないと言うのではなく古すぎるのである。

５月４日（月）

参禅日程は起床の 4 時から座禅、朝課、小食、座禅、作務、法話、中食、座禅、作務、薬石、座禅と 21 時の開枕まで続く。あたりは静まりかえっている。朝は鳥のさえずり、朝日に輝く若葉。夜は満天の星、月明かりにモリアオガエルの泣き声。南には沢筋に雪を残した銀杏峰が悠然と禅堂を見下ろしている。

この地は風水で言う「竜穴」。宝慶寺の裏には地下水がこんこんと絶える事な

く湧き出、法堂の位置は風の通り道、「気」の集まる場所であると言う。
　寺を守る木は皆、数百年の巨木ばかりで、寂光さんは「木も百年経ったら、すでに木ではない。仏だ。」と言っていた。
　私は宝慶寺の山門をくぐった時からジンジンと胸の鼓動が鳴り止まない。それは時折、嗚咽になったりする。風や月明かりや山の音のあまりの心地よさと座禅による足や背筋、肩の痛みが次第と溶け合っていく。不思議な心と身体の状態が４日間の参禅中、ずっと続いた。
　典座は中食の前が一番忙しい。典座和尚の宗徹さんは、女性である私に寺の台所の手伝いを何度か頼んできて、私も楽しみながら２度ほど手伝った。寺の食材は質素である。冷蔵庫には豊富な食材はない。痛みかけた野菜も丁寧に洗って調理する。買出しは２週間に一度しか行かないのだそうだ。それでも参禅者には満足なものを出そうと努力している。
　そして、こんなに貧しいのに、参禅者にお金を要求しない。寂光さんは「別にいくらでもいいんですよ。1000 円でも。まあ、そんなに言うなら一泊 3000 円くらい貰っておきましょうかね。」と言う。一泊３食で 3000 円！平成の時代にこの値段はありえないでしょう！
　私は台所に転がっていた腐りかかった椎茸を思い浮かべながら、帰りの交通費と諸経費などを差し引いた残りのお金を全部置いてきてしまった。

５月５日（火）１２：００過ぎに参禅終了。
　私は中国僧寂円が１８年間座禅をした座禅岩を見に宝慶寺の裏山に登った。畳 2 畳ほどの大岩が尾根から少し下がったところに鎮座し、そこからは銀杏峰の山並が一望である。ここで寂円は何を思ったのか。なぜ中国に帰らずに日本に骨を埋めたのか。私も初夏の風を仰ぎながら、しばし、この座禅岩に座ってみる。岩は暖かい。700 年前に強い絆で結ばれた日本人僧道元と中国僧寂円、その信頼関係を思うにつけ、現代の日中関係のなんとお粗末な事かと思う。靖国問題、教科書問題、毒入り餃子など、どうでもよい。日本と中国の関係は、たかだか建国 200 年の米国なんかが間に入れるほど安っぽいものではないのだ。それが証拠に 700 年も前に中国僧が開山した、この宝慶寺で何千万人もの日本人が心を救われたではないか。寂円は越前大野の地に人々の生活の糧となる伝統文化を根づかせてくれたである。
　宝慶寺を下山しても、最初に感じたジンジンする胸の鼓動は治まらない。むしろ激しくなっている。私はすぐに東京に帰らずに大野の旅館に一泊した。旅館の風呂に久しぶりにゆっくりと入り、畳の上に大の字にひっくり返ったその時、意味もなく何の感情もなく、涙が溢れてきた。思えば私の身体は、あの宝慶寺の山門をくぐった時から、私の意志ではなく何かに操られているようだった。大自然の流れに人間なんぞ誰一人として逆らう事はできないのだという事実、そして私も大自然に生かされているのだと言う感覚。私の心と体の凝りがゆっくりと、しかし確実に取り除かれていく。この状態を『至福』と言わずになんと言うというのだろう。

５月６日（水）

５日夜から降り出した雨が６日朝にはあがり、大野では朝市が開かれていた。大野は地下水が豊富で酒、味噌の老舗が多い。山も深く農家のおばちゃんたちが新鮮な山菜を朝市に持ってきている。手作りの惣菜もたくさんある。人間のぬくもりが暖かい。（東京には帰りたくない。）と心底思う。

見上げれば、遠く荒島岳、さらに奥には白山が鎮座する。その手前に朝もやに霞む銀杏峰。福井へ向かうバスに揺られながら、私はただただじっと移りゆく時を見ていた。

本堂

宝慶寺は今から約７００年前、寂円禅師によって開かれました。開山寂円禅師は、中国宋朝の人であり、明州慶元府の太白山天童景徳禅寺で、日本から入宋した道元禅師（日本曹洞宗永平寺の開山）とともに、如浄禅師のもとで参学を続けられました。その後、安貞２年（１２２８）さきに帰朝した道元禅師を慕って来朝し、常に随待しました。
道元禅師ご遷化の後、弘長元年（１２６１）この銀杏峰の麓に入り、石上に坐禅すること１８年。たまたまこの山奥に遊猟した下野守藤原氏（伊自良氏）が、坐禅される寂円禅師のお姿をみて、帰依尊信の念を起こし、一宇を草創して宝慶寺と名付け、請して開山と仰ぎました。弘安元年（１２７８）伊自良氏の知円沙弥によって七堂伽藍が造立されました。
寂円禅師はますます道元禅師正伝の仏法を宣揚されましたが、正安元年（１２９９）９月１３日、９３歳で入寂されました。

（宝慶寺ＨＰから転載）